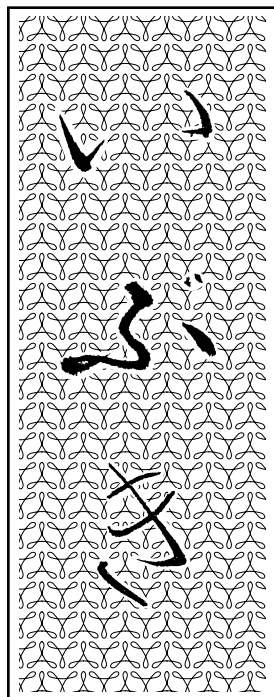




「キリスト教文化センターにて和気あいあいと」

小田武彦神父（中央）、聖堂係の岩下さん（左から2番目）、シスター重松（左）、1～4年生までの各学年の学生たち



キリスト教文化センター長 力石 辰也 ちから いし

現代の日本は総人口が減少し、少子高齢化社会となっていることは皆さんがよく御存じのことと思います。多産多死の社会から、経済成長によって医療水準が向上し、平均寿命が延びるとともに、女性の社会進出や夫婦の希望子供数の減少が原因と考えられています。日本の高度成長を支えてきた世代である今の高齢者たちの老後をどうするかは国全体の問題です。かつては高齢者を家族や近隣のごく小さなコミュニティが支えていました。しかし、核家族化や住宅事情の変化、ご近所とのかわりをあまり歓迎しない風潮などから、このようなコミュニティは崩壊し、特に都会では経済的に恵まれない高齢者が行き場所を失いつつあります。皆さんが実習に行ったり、勤務したりする病棟にも多くの高齢者が入院しています。高齢者の多くは自分で歩けなかったり、認知症があったり、耳が遠かったり、目が不自由だったりなど、多彩な心身の機能の低下を伴っています。ナースステーションでスタッフにご飯を食べさせてもらっている高齢者がいることは私たちにとっては日常の風景です。ところが、他大学から赴任してきた医師たちにとっては、このことが驚きでもあるのです。大学病院は特定機能病院として急性期の患者さんに高度な医療を提供するための施設です。自分でご飯を食べられないような高齢者が長く入院していることは、急性期医療を必要としている人たちのベッドを使ってしまうということことです。病院の機能や経営のことだけを考えれば、このような高齢の患者さんは病院にとってマイナスです。それでもこのような患者さんがある程度受け入れているのはこの大学病院に建学の精神が根付いているからに他なりません。そうはいってもこのような患者さんばかりが増えてしまえば、大学病院本来の機能・役割を果たせないことになります。私たちは目の前の受け入れ先のない患者さんをどうするかということと、病院本来の機能・役割を果たすということをギリギリのところでバランスを取っており、効率や経営ばかりが優先される医療とは無意識のうちに一線を画しているのではないでしょうか。高齢者の医療や介護について、私たちは常に建学の精神に立ち返って考えなければならないのだと思います。

（腎泌尿器外科学教授）

切っても切れない仲？ 病院とキリスト教

宗教学特任教授・宗教主事 小田 武彦

「公立の私たちの大学でも看護の歴史を聖書から説き起こしているのに、病院とキリスト教との深い関係をこ存じなかったのですか？」六年ほど前、神戸市立看護大学の学長さんからズバツと言われてしまいました。

縁あって聖マリアンナ医科大学に奉職したからには、もう頭をかきながら「知りません」とは言うておられません。そこで調べてみました。

診断は祭司の役割
聖書の一節によると、かつてユダヤ教の祭司には、皮膚病の診断をして、隔離するかどうかを判断する役割が課せられていたようです。湿疹、斑点、疱疹があつて皮膚病の疑いがある場合、その人を祭司のところに連れて行けと書いてあるのです。「祭司はその人の患部を調べる。患部の毛が白くなつており、症状が皮下組織に深く及んでいるならば、それは重い皮膚病である。・・・祭司は患者を

再び調べて、症状が治まつていて、広がっていないければ、祭司はその人に『あなたは清い』と言い渡す」（レビ記13章3～6節）と非常に具体的です。

傷つき倒れている人の隣人となる
イエスは、「隣人とはだれですか」と尋ねられたとき、次のようなたたえ話を始められました。

「ある人が旅の途中、強盗に襲われ、身ぐるみはがれ、半殺しにされてしまいました。襲われた人と同じユダヤ人の上級祭司や下級祭司がやって来たのですが、避けて通り過ぎていきました。そこにユダヤ人から民族的に差別されていたサマリヤ人がやって来ます。サマリヤ人は、倒れているユダヤ人を見て心動かされ、路上で応急救置を施し、宿に連れて行って介抱し、翌日には宿屋の主人に治療費を預けて面倒を見てほしいと頼んで出発しました。」

イエスは、尋ねた人に問い返し

て言われました。「倒れていた人の隣人になったのは誰だと思いませんか。」「行つて、あなたも同じようにしなさい」（ルカによる福音書10章25節以下参照）。

病氣の人を見舞う

イエスは別の機会に、次のようなたたえ話もされました。

「世の終わりの裁きの時、神様は右側にいる人に『あなたがたのために用意された国に入りなさい。あなたがたは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、病氣のときに見舞つてくれたから。』」そう言われた人は驚いて言います。『いつ、わたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、病氣をなさつておられるのを見てお訪ねしたでしょうか。』神様はお答えになります。『わたしの兄弟であることの最も小さい者の一人にしたことは、わたしにしてくれたことなのだよ』（マタイによる福音書25章31節以下参照）。

イエスの教えにならつて

ローマ帝国は三百年近くキリスト教を認めず、キリスト者をたびたび迫害しました。厳しい迫害の中でも、イエスの教えと出会ったキリスト者たちは、傷つき倒れている人を介抱することによってイエスの「隣人愛」の教えを具体的に生きようとし、旅人の世話をしたり病人を見舞つたりすることを大切にしました。また、「仕えられるためではなく仕えるために」来た（マルコによる福音書10章45節）と言われたイエスにならつて、貧しい人への配食サービス（使徒言行録6章2節以下参照）などにも力を入れました。

さらに、病人のために祈ることも大事にしました。「あなたがたの中で病氣の人は、教会の長老を招いて、主の名によつてオリブ油を塗り、祈つてもらいなさい。信仰に基づき祈りは、病人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます。その人が罪を犯したのであれば、主が赦してくださいませ」（ヤコブの手紙5章14～15節）。

夫に先立たれた後キリスト教に改宗したファビオラという女性は

新しいシスターの紹介



ヌヴェール
愛徳修道会
シスター
水元 文子



聖ドミニコ
女子修道会
シスター
米満なみ子

葉も、ホスピタリウムにおいて愛を具体化しようとする行為から派生したと考えることもできるのではないだろうか。

ホスピタリウムは、八世紀から九世紀頃には、病人や障害者に対する継続的なケアをするホスピタルの形態を整えるようになり、十世紀には病人を看取る近代的な意味でのホスピスとしての活動も始まっていたということです。

ヨーロッパのリキユールには、ギリシアの医師ヒポクラテスにならって、治療に役立てようと修道士たちが作ったものがあります。ベネディクト修道会ノルマンディ修道院のベネディクトイン、カルトゥシア修道会シャルトルーズ修道院のシャルトリューズ。最近、日本でもトラピスト修道会製ピールが飲めるようになりましたね。スクールシモン修道院のシメイサン・レミ修道院のロシュフォール、オルヴァル修道院のオルヴァル・・・おっと、お酒の話になるとつい饒舌になってしまいました。続きは、いつか飲みながらお話ししましょう。

ホスピス・ホスピタル

各地の教会に通うキリスト者たちは、キリスト者の生き方を習得する早道だとばかりに、喜んでホスピタリウムでのボランティア活動に参加し、温かな心遣いで病気になるた巡礼者をもてなし、孤児たちの世話をしました。ラテン語のホスピタリウムがフランス語でホスピスとなり、英語でホスピタルになったと言われています。それならばホスピタリティという言葉

温暖化の影響もあってか、とても暑い日が続く今日この頃です。

私は今年4月から毎週水曜日に総合案内（午前中）と入院患者さんの訪問（午後）をさせて頂いています。川崎区にあるヌヴェール愛徳修道院から、通い始めてもう5ヶ月にもなるうとしています。周りの方々に助けられながら続けています。

私は今までに保育経験が主でしたが、川崎に来る前はタイランドの東北にあるスリン県で七年間子どもたちの教育支援、自立支援（洋裁教室）移動図書等の奉仕をしてきました。子どもたちは貧しさの中でも輝く笑顔、生きる為の力強さが印象的でした。

現在私は、通院患者さんや、入院患者さんに関わる中で、時々「聖マリアンナの病院にかかって良かった」とか「他院で治らなかつたけど此処で治してもらった」「みんな親切で・・・」など話されると、とても嬉しくなります。

医療の現場に携わること、病気を治すだけではなく、全人格的な一人の病人の治療であることを患者さんとの関わりを通して実感させられています。

私たちは一人の人間として、その人の人生、境遇、個性の異なる一人の患者さんと直に関わる機会を与えられている事に感謝すると共に、この時を貴重なた「時」として関わりを続けたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

今年の四月から毎週火曜日、病院の総合案内の仕事をさせて頂いておられます。聖ドミニコ女子修道会のSr.米満なみ子と申します。どうぞ宜しくお願い致します。

通院、入院患者さんのお姿に、体調を崩し、静養をしていた数年前を思い出しました。その時は、不安と焦りの心に満たされていた杉浦日向子さんのことばが浮かんできました。―病は、たぶん、未知の世界からメッセージです。この体に、とりわけて、用があればこそ、はるばる来たのです。これは、じつくり言い分を聞いて、丁寧に迎え入れなければ、失礼というものです。―皆に嫌われる病に対する杉浦さんのことばです。

色々な方のことばに心が養われます。童謡詩人の金子みすゞさんの次の詩もその一つです。様々なもの・事・言を通して、心の中にお花が、一つひとつポツと開くように、何かが拓いたらいいなあと思います。

【蜂と神さま】

蜂はお花のなかに、
お花はお庭のなかに、
お庭は土塀のなかに、
土塀は町のなかに、
町は日本のなかに、
日本は世界のなかに、
世界は神さまのなかに、
そうして、そうして、
神さまは、小ちやな蜂のなかに。

アルフォンス・デーケン先生のお話を聞いて

医学部4年 新井 裕貴

昨年11月12日にアルフォンス・デーケン先生のお話を伺いました。以前から先生の書かれた本を読んでいたのですが、一度お会いしたいと思っていました。死生観をテーマにした内容なのに重苦しくなく、優しくユーモアたっぷりのお話で、二時間の講演があつという間でした。

「よく生きよく笑いよき死と出会う」これは医療従事者にとつても、また自分の人生においても重要なテーマです。私たちには、いつか必ず死がやってきます。愛する人の死を迎える時が来ます。デーケン先生は、death educationを通して教えてくれました。「死は生の対極にあるのではなく、生の一部として存在している」というように、「死」は決して重苦しいものではなく、生を輝かせてくれるものです。もっと死について考えれば、時間を尊いものとして意識し、もっと精一杯生きるようになりそうです。死を思うことで、当たり前だと思っていたことが、当

たり前でないことに気づかされます。今日という与えられた一日に、感謝して生きようと思います。death educationとは、同時にlife educationであると感じました。いまや日本人の平均寿命は世界一となり、21世紀医学と科学の新しい挑戦は肉体的生命をのばすだけでなく、心理的生命・社会的生命・文化的生命をのばすことが求められるようになりました。私たちは患者さんの病を診るだけでなく、心の痛みや置かれている社会的・文化的背景も考える必要があります。もう治療の施しようがなくなつて、医学の力が矢折れ力尽きたとき、デーケン先生は、beingよりもbeingが大切であると言います。何もできなくても、傍らにいて、心を開いて相手の話に耳を傾けることが救いになるのです。人間は、死ぬときは一人です。財産はもっていきません。どんなに大きい土地を持っていたとしても、骨を埋める土地は、僅かな分です。自分の死は一度し

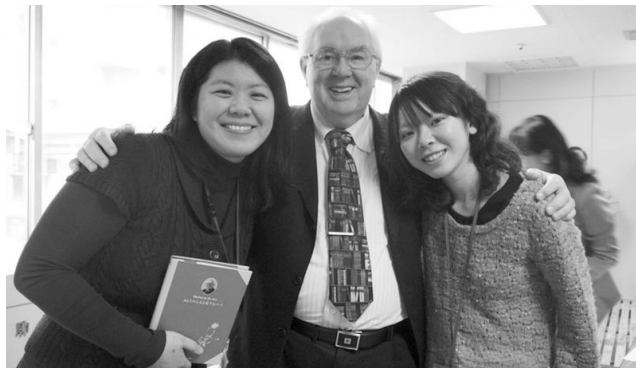
か体験できない、その後の世界は分からない、だからこそ、死は不安なものだと思います。けれど、「共に喜ぶのは二倍の喜び、共に悲しむのは半分の悲しみ」というように死に寄り添ってくれる人がいてくれるのは、それだけで大きな助けになるはずです。死をのり超えるのは愛と許しの力だと思えます。私は愛する人の手を握りながら、ありがとうと言つて死にたい。憎しみはそれ以上のものを生み出さない。許すことで、私たちは解放され、平静でいられるようになると思います。

デーケン先生はまたユーモアの大切さを教えてくれました。「笑う」にしても、ジョークとユーモアは違うもので、ジョークは風刺や批判で他人を笑い、ユーモアは自分自身をも笑います。自分を笑うユーモアは相手の緊張をほぐし、心と心を触れ合わせ、思いやりと愛をもたらします。ドイツの有名な定義に、「ユーモアとは、にもかかわらず笑うことである」とあります。謙遜に自分の馬鹿さや失敗を認めながら、一緒に笑えれば、そこには救いがあるのです。人間らしい生き方の為に、また健

康の為にユーモアは必要だと感じました。

デーケン先生のお話を聞いて、改めて死や、生きることについて、また心のケアについて考えることが出来ました。

私も、苦しい時でも日常生活の中にユーモアを忘れず、患者さんのニーズを聞き、感性豊かに喜びや苦しみを分かち合い、その人生により沿っていただける医師になりたいと思います。



デーケン先生と(右・新井裕貴さん)

井上 武夫先生（腎泌尿器外科学名誉教授）講演会

『我が生涯における 死・緩和ケアのかかわりについて』

昨年度3月2日、神経精神科・

緩和ケア研修会の二宮正人先生司会のもと、本学名誉教授の井上武夫先生に講演をしていただきました。

井上先生は昭和46年から平成2年まで本学の泌尿器科教授であられました。その間、日本ではまだ根づいていなかった緩和ケア・ターミナルケアの研究を自ら率先して始められ、昭和58年には本学にターミナルケア研究会を設立、『症例から学ぶターミナルケア』という本を出されています。今でこそ、死生学、魂のケアなどよく耳にしますが、当時の大学関係の中ではまだこういう類の本はなく、おそらく臨床の現場から初めてターミナルケアを扱った本であつただろうとお話が印象的でした。

また、本学のチャブレンであられた故山本善次郎神父とも親交あつく、「医学とキリスト教の接点」という講義を学生にもよくお話し

されたそう。この度もキリスト教精神を基盤にしている本学への期待を大いに語って下さいました。

魂のケア というのは、すべての人間の存在にかかわってくる問題であつて、けっして西洋の言語から翻訳された（たとえば「スピリチュアルケア」を翻訳して日本に輸入したような）ものではなく、死を見つめる心を自分のことばで掴み、自分自身が解る聞き慣れたことばで語りうるものであり、そのひとりひとりの物語りが大切であること。そして最終的には、仏教もキリスト教も根は同じ「愛すること」に通じ、かわりの中で自分が愛された存在であるということを知りたいのが「人間」であるということ。また、先生ご自身の癌体験から、肉体の一部を切除するような肉体的「部分死」について、さらにそこから社会的・精神的部分死というものにつ

いても思いをはせるようになられたことから、いのちと向き合う医者にはやはり、以上のようなことを一度たちどまって考えなおす必要があるとお話下さいました。

そして、医療職という仕事は、尽くす気持ちがあれば誇りある仕事である、と締めくくられました。

昨年度キリスト教文化センターでは2回の講演会を催し、いずれも緩和ケア・グリーフケアにかかわることでした。実は先に行なわれた11月のアルフォンス・デーケン先生講演会に井上先生が来て下さつて、講演会後にお二人が固く握手をされた瞬間がありま

した。一瞬の出来事ではありましたが、先駆者であるお二人が手を結ばれた貴重な瞬間でした。その場を写真に納められなかったことが悔やまれるのですが、ここにこの出来事を記載することで記憶にとどめておきたいと思います。

（キリスト教文化センター職員

中村真理）



ユーモアたっぷりにお話下さった井上先生

キリスト教文化センター活動状況(平成23年度)

本センターの活動の多くは前年度に引き続き継続していますが、平成23年度は、本センター主催の講演会やホームページの立ち上げなど、昨年度より活動内容の幅が広がった一年間となりました。また本センターの役割は、学生・教職員との交流が主ですが、病院勤務のシスターが6名となり協力体制も若干の変更があった中で、病院と大学を含めた公的行事への参加が多くみられました。平成23年度の活動内容を報告します。

2011年4月11日

新入生オリエンテーション

5月24日

新入生歓迎会



- 日常風景 -



8月26～28日

日本カトリック医師会主催「第27回カトリック医療関連学生セミナー」への参加

9月3日

日本カトリック教育学会 自由研究発表にて、中村真理が「聖マリアナ医科大学キリスト教文化センターの役割について」を報告

10月4日

創立者等追悼ミサへの参加

10月5日

解剖学遺体追悼ミサへの参加

11月12日

アルフォンス・デーケン先生講演会「よく生き、よく笑い、よく死と出会う」を病院ボランティア会ランパスと共催

11月19～20日



聖医祭にて、被災地復興支援のチャリティバザーを開催

12月13日

クリスマスの集い



12月22日

クリスマスコンサート

2012年3月2日

井上武夫先生(聖マリアナ医科大学腎泌尿器外科学名誉教授)講演会「我が生涯における、死・緩和ケアのかかわりについて」を主催



学生の声

■医学部2年 木村 未祐奈

お昼休み、あるいは授業後に、少し時間が空いた時。昨年は教室の前方のドアをちよつと開けて、左側をちらつと見る。今年は二つ上の階である三階の吹き抜けから、真下を見下ろす。「あつ、キリ文が開いてる！真理さん」キリスト教文化センター（以下『キリ文』と記す）に足を運ぶようになったきっかけを、鮮明には覚えていない。しかし私は人が集まる憩いの場が好きなので、自然と惹かれていったように思う。いつもキリ文にいて下さる真理さんを筆頭に、時折いらつしやるシスターの方々、先生方、先輩方、友達、後輩達……。大きな窓から差し込む太陽の光、美味しいお茶やお菓子、誰かが奏でるピアノの音色、



そして皆の明るい話し声と優しさに包まれて、キリ文には常に温かく穏やかな時間が流れている。そう、ここは教育棟のオアシス。

キリ文の中に足を踏み入れると、真理さんが必ず笑顔で声をかけて下さる。その笑顔に和みながら、私はピアノを弾く。心の赴くままに自分の好きな曲を弾くことや、部活の演奏会で弾く曲を本気で練習することもある。ふんわりとした空気が心地よくて、ピアノ椅子の上でお昼寝することもある。些細な事、大切な事、色々な事を話す。そしてキリ文を後にする頃には、ほんの十分前まで曇っていた心は何処へやら、綺麗に晴れ渡っているのだ。

いつだったか私におつしやつて下さった言葉がとても嬉しくて、今でもよく思い出す。――未祐奈ちゃんのピアノは言葉みたいに、まるで話しかけるように弾くから、とても好きだなあ――

キリ文には、人々の心を繋ぎながら各々をそつと癒してくれる、不思議な力がある。キリ文が無ければ出会えなかったであろう人と巡り合う、小さな奇跡が無数に存在する。

教育棟のオアシス、キリ文。この存在と、オアシスに素敵な雰囲気を作り出して下さる真理さんに、感謝したい。



(中央 / 左から3番目)

■医学部3年 萩原 義也

この大学に入つてすぐ、キリ文を見つけた僕は、その居心地のよさに驚いた。晴れた日は、全面のガラスから差し込む光がまぶしく、つるされたステンドグラスが鮮やかな空間だ。1年生の自分にとって、学校はまだ異空間でなれていなかった。だけど「キリ文」では、なぜか落ち着くことが出来た。そんな「キリ文」を僕は、「マリアンナの保健室」と比喻する。3年生になって、大学での生活を振り返ると辛い時期には必ずと言っていいほど「キリ文」に居た。体調がつかつたときもあつたし、精神的につらかつた時期もあつた。そんなときに、「キリ文」が、僕の支えになってくれたと思う。少し、友達に言い辛いような

話でも中村さんには相談できるし、食事がのどを通らない程辛い時期には、シスターがおまんじゅうを差し入れてくれた。そして、「キリ文」にあるたくさんさんの本は、人生の指針になってくれた。僕にとって、「キリ文」は、心の休まる休息の場である。時間が空けば足が向き、椅子に座つて学友が弾くピアノに耳を傾ける。最高に優雅な休息だと思つた。

また、「キリ文」では、学年や学部に関係なく、いろいろな人とかかわることが出来る。3年である僕に他学年で部活以外に交流できる先輩や後輩が居るのは、「キリ文」のおかげに他ならない。シスターや神父様、看護学校の学生さんだつて交流を持つことが出来る。「キリ文」には、教室では得られない沢山の糧がある。

医師として、必要なのは学力だけだろうか。辛い時に人に寄り添つて居られる人間になること、人生の先輩から多くを学ぶこと、そういうことも本当に大切だと思う。そういう、授業では教えてくれない人間力を養ってくれる場所、それが「キリ文」なんだと思う。僕は、「キリ文」で自分を成長させるヒントをたくさん得た。これからも暖かいその空間で、多くの学生の支えになってほしいと思う。

特別教育施設

「聖堂」より

文と絵 岩下 光幸

4月から、聖堂の管理責任者を拝命し、再度聖堂業務のお手伝いをさせていただくことになりました。皆様のために、少しでもお役に立てられたら幸いに思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

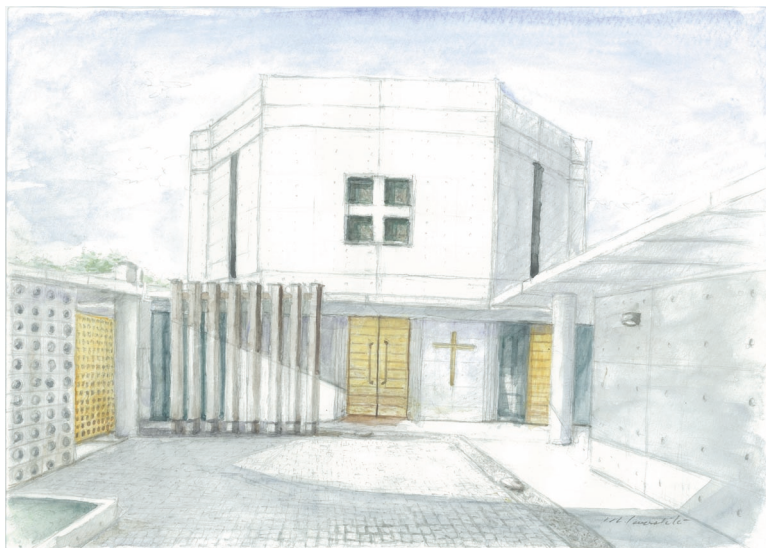
開堂時間

月～金 / 8 : 30～17 : 00
(土・日・祭日は閉堂)

病院外来診療日の第2・第4土曜日は12時30分から患者様等のためのミサが行われております。

毎日の多忙な仕事、学業、生活の中には喜び・悲しみ・悩みなど数多くの出来事があります。誰かに心を伝えたい時など、一度聖堂を訪問し、心静かに祈りしてみてはいかがでしょうか。きっと何か得られるはずです。

聖堂は何時でも皆様方のためにあり、門は開かれております。



《お知らせ》

■キリスト教文化センターのホームページを立ち上げました。

<http://www.marianna-u.ac.jp/kiribun/facilities/009914.html>

「いぶき」バックナンバーや『マリアンナ・スピリット』もPDFにてご覧頂けます。

■毎年新生入生に配付している祈りの本『マリアンナ・スピリット』の新・改訂版を発行しました。ご希望の方は、お問い合わせ下さい。

■本欄より

現在、井上武夫先生の『症例から学ぶターミナルケア』の本を探しております。もしお持ちの方で寄贈いただけるようでしたら、一報いただくと幸いです。

編集後記

この4月より、宗教学特任教授・宗教主事(チャプレン)として小田武彦神父が着任され、また、聖堂管理責任者として元職員の岩下光幸氏を、さらに病院総合案内にも2名のシスターを迎え、新体制となりました。新しい「キリ文」もこれまで同様どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

さて今回は、小田先生からコラムとしてメッセージを、シスターからは自己紹介のご挨拶をいただきました。本センターの役割は、常に建学の精神に立ち返って歩めるよう大学・病院をサポートすることですが、創立以来多くの方々の協力のもと今のセンターが存続していることにいつも多大なる感謝をせずには居られません。おそらく見えない形ではありますが、その時その時に、聖マリアンナの精神を大切に思う方が助けて下さった歴史があるのだろ〜と感じます。そのことをいつも忘れず心にとめながら、新しいかわりの中で創られていく本センターのメッセージを、小さなニュースレターではありますが、これからも祈りとともに「いぶき」としてお手元にお届けしたいと思っています。

(中村 真理)

発行 聖マリアンナ医科大学

〒216-8511 川崎市宮前区菅生2-16-1

キリスト教文化センター

編集 力石 辰也

印刷 城南印刷センター

印刷 城南印刷センター